

特 集

精神療法における治癒機転

第 63 回日本精神神経学会総会シンポジウム*

□ はじめに □

司会 懸 田 克 躬

精神療法における治癒機転に関するシンポジウムを企画した理由は、精神療法における真の治癒機転の究明が実はけつして明らかにされてはいないという考えからであります。もちろん、いろいろの精神療法が提唱され、かつ、実施されて治療効果をあげていることはみなさんのご承知のごとく事実であります。そしてその治癒という現象に対しては、その精神療法の方法論の背景となる神経症論、あるいは人格理論にもとづいての説明はなされていることも私どものよく知るごとくであります。

たとえば、精神療法にとつて適応症例というであろう強迫神経症を例にとつてみましょう。強迫神経症の成因、本態あるいはその治療の方法とその理論的根拠とに関する理論あるいは主張の

数多く見られることはどうしたわけでありましょうか。各人が各人の神経症に関する理論と治療法とを身につけているといつても過言ではないのはありますまいか。そして、このような事態はけつして科学というにふさわしい理論にとつて好ましい、あるいは妥当するものではあるまいと思われます。

このシンポジウムで各演者の方々に、個々の症例に即して、自己の奉ずる理論の枠組みのなかでの解明あるいは論究ではなく、一般的なあるいは他の立場のものにも理解可能な理論と記述のなかで治癒機転を考えていただきたいと申しました心の底には、実はこのような疑問といえますか切願が潜んでいたのであります。

そのような一般理論というようなものが可能なのかという反問は容易に予想できますが、私はあえてこの暴挙かもしれない試みをしてみるべきだと考えたのであります。この試みが成功するか失敗するかは予測できませんが、非常に困難なことであろうことは予測できるのであります。しかし、この私の切願を汲まれて十分に論議されることを期待するものであります。

写 真

左：司 会 懸田 克躬氏（順天堂大学神経科）
右：副司会 小此木啓吾氏（慶応大学神経科）



* 第 2 分科集会，1966 年 4 月 8 日，東京国立教育会館